博士学位(神学)論文要約

論文題目：　「備中高梁におけるキリスト教会の成立の研究」
氏　　名：　　八木橋　康広
要　　約：
[１]内容概略

本論文は岡山県備中高梁地方にプロテスタント・キリスト教が伝道され高梁基督教会が設立されて町の中に根付くまでの歴史的過程をその前史（幕末期）にまで遡って考察したものである。

序章では、まず研究課題を提示した。日本においてプロテスタント・キリスト教が受容されて根付いた土地柄は東京、大阪などの大都会、或いは県庁所在地などの地方の拠点都市であり、その主な担い手は伝統的な共同体から自立した近代的中産階級であった。ところがその対極に位置する中国地方の山間部の旧時代の伝統を色濃く残す備中高梁において明治十年代にキリスト教が伝道されて二十年代前半には町の中に確たる基盤を確立した。その過程を歴史的背景も含めて考察するのが本論の研究課題である。そのために高梁におけるキリスト教成立に関する一連の先行研究の概要を批判的に検討した。次に本論文の拠って立つ方法論を提示した。

方法論として①有賀鉄太郎著『象徴的神学』、②魚木忠一著『日本基督教の精神的伝統』から主に以下の論点を抽出した。①歴史上の人物の信仰体験の意味は研究主体である自分自身の信仰体験を通して共感的に理解され解明されるべきである。この方法によって研究対象である人物の信仰体験の基本的な構造を探求してゆく。②世界宗教であるキリスト教は決して一枚岩ではなく精神的風土によって六つの類型に分類される。日本に成立したキリスト教はその中でも日本類型に属する。それは、仏教、神道、儒教という日本の伝統的な宗教が培った精神性を土台にしながらも明治前期に欧米から移植されたキリスト教（主にプロテスタント）に触発して福音信仰として成立したものである。備中高梁地方に成立したキリスト教は日本類型の典型であると考えられる。

第１章では、新島襄と備中松山藩の絆を叙述する。高梁の地にプロテスタント・キリスト教が伝道された淵源を訪ねると新島襄と備中松山藩の人々との出会いにまで行き着く。備中松山藩は板倉勝静が藩主に就任するや儒学者の山田方谷を登用して藩政改革に取り組んだ。改革は藩と領民生活のあらゆる領域に及んだ。その中で川田甕江が登用された。川田は江戸藩邸の儒学師範となったが、分家の安中藩板倉家にも出講してそこで少年時代の新島襄と出会い終生にわたる師弟の絆を確立した。さらに川田は藩主の側近として藩に近代的海運・海軍を建設するために洋式帆船（快風丸）を導入し、幕府軍艦操練所で航海術を取得していた新島を同船での航海訓練に参加させた。

この航海で自由を体験した新島はその意味を追求していくうちにアメリカ合衆国に密航して新知識とキリスト教を修得してその力をもって危機的状況にある祖国を救うこと

を決意した。新島は川田と板倉の斡旋で快風丸に便乗することができて江戸から開港地であった函館に至った。同地で備中松山藩士らの決死の幇助でアメリカ船に匿われて密出国に成功した。その後新島襄は希望通りにアメリカにて修学がかなった。日本人初の学士となり牧師の資格を得て明治 7 年（1874）帰国し翌明治 8 年（1875）京都に同志社英学校を開校した。

第 2 章では、備中高梁（明治維新以前は備中松山）における幕末維新の動乱と明治政府による文明開化路線とそれに翻弄される人心の一断面を叙述し、未曾有の動乱と社会革命が高梁にも激烈な社会秩序の動揺と人心の荒廃をもたらしたこと、心ある人々は真に魂を慰め希望を与える福音を求めていたことを解明する。

第 3 章では、前半にてプロテスタント・キリスト教が岡山県に到達するまでの過程を新島襄の帰国後の活動とアメリカン・ボード、そして彼らを受け入れた岡山県の有力者たち（中川横太郎・県令高崎五六）の思想と行動と人脈に焦点を当てて解明する。後半では県都岡山に拠点を確立したキリスト教がさらに山間部の高梁にまで到達する過程を取り扱う。その際、キリスト教を伝道した側の中心人物である J.C.ベリーと金森通倫の略歴、そして新島襄の第一回の高梁伝道の模様を詳述する。彼らの播いた福音の種を受け入れ信じて教会設立の中心人物となった柴原宗助・二宮邦次郎・福西志計子・赤木蘇平の略歴と活動を紹介する。これらの人々は高梁教会設立の中心メンバーであると同時に高梁における近代的教育・医療・産業の旗手でもあった。

第 4 章では、教会創立の前段階である高梁安息日学校の開設から高梁基督教会創立までの過程を叙述する。新島襄の第一回高梁伝道を契機に高梁では上記の人々を中心にしてキリスト教の伝道熱が高まり組織作りが始まった。その最初の動きとして定期的な演説会が開催された。この活動は町民に新鮮な衝撃を与えて賛否両論を巻き起こした。キリスト教支持派の高揚と反対派の忌避や妨害の中で明治 13 年(1880)7 月に最初の組織化がなされて高梁安息日学校が開校した。これを機軸にして正式な教会創立の機運が高まり同 15 年(1882)4 月二宮邦次郎を仮牧師に、伊勢（横井）時雄を設立委員長にして高梁基督教会の創立式が行われ柴原以下 15 名の高梁人が金森通倫より受洗した。創立式中に第二代牧師として上代知新が招聘された。この後二宮は上代の故郷の愛媛県松山での伝道を担い、上代は二宮の故郷の備中高梁での伝道を担ったが、そこには両者の格別の絆が推測できる。しかし上代は僅か半年で辞任し、第三代牧師として森本介石が赴任した。

第 5 章では、第三代牧師である森本介石の時代に起こったリバイバルと大迫害事件という劇的な出来事とその顛末によって高梁基督教会の霊性の土台が形成されたことを、主にこの一連の出来事を指導した森本介石の思想と行動に即して解明する。リバイバルは、新約聖書使徒言行録 2 章に記されたペンテコステの聖霊降臨の高梁における再現ともいえる事態であった。これを体験したのは 100 名前後の信徒であるが、彼らは集団的熱狂状態の中で罪深い古い自己が死んでキリストの永遠の命に与ったと確信し、すべての隣人にその喜びを伝えようという熱気に満たされた。しかしそれ以外の大多数の町民

には未だに耶蘇教とは最も忌むべき邪宗門であるという封建時代の感覚が染みついていた。それに加えて高梁の警察署長が個人的にキリスト教を烈しく憎悪し住民に迫害を扇動していた。

リバイバルによるキリスト派の大高揚は、警察署長はじめ反キリスト派の憎悪に火を付け、両者の対立は先鋭化し、その結果として明治 17 年(1884)7 月の大迫害事件（暴徒の教会堂襲撃）が勃発した。しかし、高梁警察署長の上司である高崎五六岡山県令は大のキリスト教支持者であり、アメリカン・ボードと提携して岡山県の近代化を推進していた。高梁における迫害事件を知った高崎は直ちにキリスト教徒を保護すると同時に迫害の厳禁と事件の徹底糾明に乗り出し、警察署長の解任をはじめ迫害に加担した者を粛清する人事を敢行した。これを見た一般の高梁町民は、キリスト教は仏教や神道と同じように公に認められた宗教でむやみに迫害してはならないことを体感した。これを機に以後公的な場での迫害は終息した。森本介石は、迫害事件の終息の直後に辞任した。新たに赴任したのは第四代牧師となる古木虎三郎であった。

第 6 章では、明治 17 年夏の大迫害事件の終息から明治 25 年(1892)の古木虎三郎の辞任までの時代を叙述する。大迫害事件の表面上の終息を受けて就任した古木虎三郎の使命は、未だに深い亀裂の中にあるキリスト教徒とかつての迫害者を含めた教会外部の大多数の町民との精神的わだかまりを取り除き、キリスト教を真に高梁に根付かせることにあった。古木はこの使命を遂行するために聖書の説く罪の悔い改めを強調した。これに応じて町民の中から続々とおのが罪を古木に告白して洗礼を授けられる者が出た。古木の在任中に高梁の人口の内 8 パーセントを超える人々が教会員となった。これに加えて古木は新たな教会堂を建立する事業をはじめた。この資金のほとんどは、教会員・求道者と一般の町民によるものだった。古木の呼びかけに応じて自らの罪を告白した者、それには至らなかったが教会堂建築のため浄財を投じた一般の町民の中には、かつて信徒への迫害に加担した者も多数いたと推測できる。

終章では本論文全体の結論が示される。明治 22 年(1889)に現存の高梁基督教会堂が竣工した。この建物は、高梁最初の洋風大型建築物であり、その意味で高梁全体の文明開化の象徴と言える。それと同時にキリスト教の受容を巡って町を二分した対立を和解させた象徴でもある。以後高梁教会は、高梁におけるキリスト教精神と近代文化の主要な担い手としての位置を確立し今日に至っている。

こうして備中高梁に、この町の精神性的風土に根ざしたキリスト教が成立した。

[2]本論における神学的主張

備中高梁の人々は、明治維新の動乱と社会革命という未曾有の試練によって、新旧両時代の暗闇と混沌をゆえなくして押しつけられていた。そのただ中へ明治 12 年(1879)秋から新島襄とその同志たちによってプロテスタント・キリスト教の教えが初めて伝えられた。新島は備中松山藩板倉家の分家、安中藩板倉家の江戸詰藩士であった。

新島は、藩主板倉勝静と山田方谷の藩政改革によって江戸藩邸に登用された川田甕江

に 15 才の時から師事した。彼は師、川田甕江の導きで、この備中松山藩の精神性が物理的な形となった洋式帆船快風丸に乗船し真理と自由の手応えを得た。そしてこの体験が起点となって、天地万物の創造主である神の存在と、神への信仰を基として自由と自治を統治原理にしているアメリカ合衆国の存在を知った。新島はこの神の教えと自由を学び取り、それをもって救国の礎とすべく、日本脱出と米国での修学を決意した。そして川田甕江と板倉勝静は、新島を快風丸に乗せて自由の天地（米国）への〈入口〉である函館まで送り出した。備中松山藩士らの決死の幇助で、新島は米国船に匿われて密出国に成功した。

新島は亡命者という一年余りのいわば陰府の航海の中で、日本武士として死んだ。そしてピューリタンの都、米国・ボストンに到着し、ピューリタンの嫡流ともいうべきA.ハーディー夫妻にその器を見出され、養子として迎えられて米国市民として復活した。彼は十年近くの研鑽の中で、おのれの魂の形を、儒教的な至誠惻怛（しせいそくだつ・天に対する忠誠と隣人への仁）から、ピューリタン的な主イエスへの信仰と隣人愛へと変容させた。

新島の魂の変容が成就し修学が軌道に乗った頃、日本では明治維新という未曾有の政治革命が成就し、新政府は鎖国政策を捨てて、欧米諸国に対して進んで国を開き西洋文明を日本に取り入れることで新たな国造りをはじめた。

その青写真を描くために政府首脳が米国にやって来て、新島はいわば文明開化の同志として迎え入れられた。その結果、明治 7 年 11 月に帰国がかない、思う存分に天父の教えをもって救国の仕事に邁進した。その一環として、明治 13 年と 16 年の二回にわたり、かつて彼の大志に共感して米国へ向けて送り出してくれた備中松山（明治以後高梁）の地にやって来て、明治新時代にふさわしい至誠惻怛の教え、すなわち彼が米国で身につけたピューリタン的キリスト教の真髄をすべての町民に伝授しようとした。

約五千人の高梁町民の内から 16 名の人々が選び出された。彼らは新島襄の教えを〈魂の良き知らせ〉(福音)と信じ、その教えを新時代の高梁の町と町民の指導原理にしようとした。それが明治 15 年 4 月の高梁基督教会の創立だった。

この時彼等の魂には、死すべき朽ちるべき罪深いこの世のただ中に永遠の命と真理が降臨し、おのれらの中に宿ったことが実感された。真理の霊の降臨を体験した 16 名の同志は、地縁や血縁や身分や格式、貧富の差などあらゆるこの世の絆やしがらみを超越して、お互いを真の兄弟姉妹であると実感した。この時彼等は、儒教を代表とする古い日本的な自分に死んで、キリスト教という西洋的な新しい自分に生まれ変わったという実感、つまり断絶面が強く自覚されていた。

しかし、彼等の魂の変容ぶりをより広い視点から検討してみれば、断絶面と同じくらいに連続面があることが分かる。すなわち太古の昔以来、この地の人々の肉体と精神に宿る質実剛健さは、江戸時代後期の山田方谷の登場によって至誠惻怛という精神の形となっていたが、その精神を入れていた儒教や備中松山藩という器は、幕末維新の未曾有

の動乱と社会革命で粉々に砕かれてしまった。しかし彼等の魂の奥底に宿る霊は、なおも健在だった。新島襄とその同志は、それをプロテスタント・キリスト教の教えにより再び覚醒させたと言える。

こうして彼等の質実剛健さと至誠惻怛という魂は、その実質をそのまま保存しながらも、その外形は、神の子イエスを救い主として信じ、その信仰によって隣人を兄弟姉妹のように愛するという、明治の文明開化時代にふさわしい形に変形（reform）された。こうして彼等は儒教を棄ててプロテスタント・キリスト教徒になった。これがすなわち備中松山－高梁における宗教改革の真価だった。

彼等は天地の創造主であり永遠の命であり真理である唯一の神と、その御子にして救世主なるイエス・キリストを実感し、その霊と一体化するという奇跡的な神秘体験をしたが、それはその証であった。それが明治 16 年に勃発したリバイバルの出来事の意味である。リバイバルとは、百人近くの集団が一時に卒倒するほどに激烈な魂の救済体験である。

しかしこのような激しい宗教体験は、日常の世界に安住する人々には理解できるはずもなく、多くの町民の封建時代に刷り込まれていた不安と偏見を呼び覚ましてしまった。このようなキリスト教に対する嫌悪と反感の空気は、新時代から取り残されて時代そのものに対して激しい怨恨感情を燃えたぎらせていた旧時代の支配階層であった仏教勢力と多くの士族にとっては、キリスト教徒を〈犠牲の子羊〉にして排斥するための最も都合の良い追い風だった。

かくして高梁では町をあげての大迫害が始まり、約五千名の全人口が、キリスト教を受け入れるか排斥するかで、約百名の信徒ならびにそのシンパと、残りのほとんどの住民とにまっぷたつに割れてしまい、数も多く町の権力を握る排斥派が問答無用の迫害をはじめた。

さらに高梁の場合、キリスト教に対して宗教的・職業的な憎悪を燃やす本願寺派の僧侶が警察署長だったことが、迫害の火に油を注いだ。こうして、町をあげての大迫害が明治 17 年 7 月に起こった。しかし当時、日本は国を挙げての欧化主義的流行の真最中で、明治政府と中央世論はキリスト教に好意的であった。しかも岡山県の独裁的権力者である県令・高崎五六は、キリスト教の大の支持者だった。そこで高崎県令は、この迫害事件を知るや否や、高梁におけるキリスト教保護指令を出し、また警察署におけるキリスト教排斥派の徹底的な粛清人事を行った。そこで高梁の町民は〈ヤソ教はお上から公認された宗教〉であることをはじめて体感し、それ以後二度と公然たる迫害は起こらなかった。

また、高梁の文明開化(近代化)を進めるにあたって、数多くの教会員が新しい町作り人造りの指導者として活躍するようになった。こうして高梁では、災い転じて福と成すということわざ通り、迫害事件とその後の大逆転によって、封建時代以来のいわば精神上の悪性のウミが全て出尽くし、すっかり洗い流されることができた。しかしすり鉢の底

のように閉鎖的で密集した人間関係の坩堝であるこの古い城下町で、一旦生じた人間関係の亀裂を元通りに修復するのは並大抵のことではなかった。

県当局の介入によって事態が終息し日常の落ち着きを取り戻すと、何らかの形で迫害に荷担してしまった多くの町民は悪夢が醒めた後のような心理状態となった。それは多くの町民の無意識の奥底にこびりついて、何か事ある毎に表面に出てきて、個人的な人間関係ばかりか公的な共同性も大いに損なってしまう危険があった。ところが実際には、それとは正反対の事が起こった。教会と信徒は高梁の屋台骨に食い込んで、それを支え導く有力な一角を占めた。爾来 120 年以上にわたって、基本的にその在り方は現在まで続いている。これは日本の地方の小都市では希有のことである。

その秘密は、古木牧師と教会員の信仰にあった。つまり、かつて受けた耐え難い屈辱や迫害、心の中にこびりついた恨み辛みや憎しみなどの暗黒の情念の一切を、相手に向ける代わりに、信仰によって自身の心の中で昇華した。他方かつての迫害者は、自分の家族や親族や同僚や師弟の間柄であった教会員に後ろめたさを感じ、その思いを心の奥底に抑圧していたが、古木牧師はそのような良心の呵責に責め苛まれている人々を特に意識して、神の前での罪の悔い改めとイエス・キリストによる罪の贖いと魂の救済を説いた。

その結果、多くの者がこの勧めに魂を揺さぶられ、古木牧師の 7 年半の在任中に、250 名以上の町民が罪を悔い改めて洗礼を受け教会員となった。また独力で町の中心に完成させた現在の会堂は、高梁の新時代のシンボルとなったが、これを支持し協力したのは多くの高梁町民であり、その中には良心の呵責に責め苛まれていたかつての迫害者も少なからずいたと考えられる。こうして古い城下町の中心に屹立した最初の洋風大型建築である白亜の教会堂は、教会員の信仰の勝利の証であると同時に、かつての迫害者の良心の呵責の贖い—罪滅ぼしのシンボルにもなった。

こうして、プロテスタント・キリスト教は高梁の町と町民の魂に土着して、今日に至っている。これが、岡山県高梁において独自の霊性を有するプロテスタント・キリスト教会が成立するに至った経緯である。